

# 新任教員紹介

## 新任教員

平成31年1月1日付け



医療技術学部 講師

**丸川 活司** (まるかわ かつじ)

札幌医学技術専門学校卒業。北海道大学大学院医学研究科・医科学専攻博士課程修了。総合病院旭川赤十字病院病理部、北海道大学病院病理部、同医療技術部副技師長(病理部主任技師)等を経て、本学就任。医学博士。

## Message

## 定年退職される先生からのメッセージ



薬学部 教授  
**齊藤 浩司**

私は1996年4月に薬学部薬剤学研究室助教授として採用されました。それまで北海道大学医学部附属病院(現北海道大学病院)で薬剤師としてずっと勤務していましたので、当初は大学教員として自分はどこまでやれるか自問自答の繰り返しでした。私が着任した頃は全国の薬学部で医療薬学教育の充実化が図られようとしていた時期で、学位を有する薬剤師が医療現場から何人も大学教員として転出しました。1999年1月から薬剤学研究室をお預かりしてきましたが、定年まで何とか職責を全うすることができたのは、前任の高田昌彦名誉教授はじめ、学内外の多くの方々のご指導・ご支援のお陰であり、深い感謝の念に堪えません。

振り返ってみると、この二十数年の中で学部運営も含め実にいろいろなことに取り組む機会を与えていただき、その一つ一つが大学教員として自分が成長する糧になって

いったように思います。薬学教育がまだ4年制だった頃、薬剤学研究室には多くの大学院生が所属してくれました。まだ50歳前後で血気盛ん(?)な私の叱咤激励に耐えながら頑張ってくれた研究成果は、私の生涯の宝です。病院薬剤師時代からアルコールに多少の自信を持っていた私は、学生たちとしばしば当別の焼鳥屋さんに繰り出してどんちゃん騒ぎをし、出入り禁止寸前になったこともありました。懐かしい思い出が一杯詰まった23年間でした。

薬学部には新しい先生方も次々に加わるようになり、私と同年代の先生方を第二世代とすれば、徐々に第三世代へと移りつつあります。若い先生方には日本の薬学教育の最先端を進む北海道医療大学薬学部の創造をめざして大いに活躍されること、そして、本学が更なる発展を遂げられることを心よりお祈り申し上げます。



看護福祉学部 教授  
**平 典子**

### 振り返れば

26年…看護福祉学部開設と同時に歩んできた年数、道のりとして、ただただ感慨深い。

着任したのは、開設3年目となる1995年でした。当時なぜか、「大学院をおえたばかりの新任27歳」という触れ込みだった。当然(?)、積極的に修正しなかったために、数年以上15歳ほど年齢詐称し過ごしていたものです。当初の驚きは二つ。教員としてお話をいただいたときの殺し文句、「札幌から車で30分」とはあいの里からだったもう一つは、学生が近い気づくと、すぐ後ろにひっついてくる。昼には、メロンパンを持参し食べにくる。長期の休み直前は、研究室に大きなカバンがごろごろ置かれる。彼ら曰く、食事する場所がない、ロッカーが狭い、居場所がない。まあ、もっともな言い分ではありますが、自身の学生時代でも前任校でも、ついぞ経験したことのない学生との距離感でした。思えば、この自由な感覚、明るさそして学生との距離感こそが、私をこの大学に引き留めたマグネットだったのだと気づきます。

本務について思い出されるのは、学部の創生時期、しか

も1年目から教育が始まる講座でしたから平均睡眠4時間で走り続けている姿です。それでも、道内初の看護系大学としてテキストの切り貼り教育はするまいと、皆パッションを持ちエネルギーに過ごしていたものです。為し得たものがあるとしたら、開設当時の先輩から脈々と受け継がれた技術教育について、看護技術の構造化の研究に取り組み、模倣や暗記型の「何を」するのではなく、原則を核として「なぜ」そうするのか柔軟に考え成果を生み出していく技術習得へと組み直したことでしょうか。これは、看護学の伝統的な教育法と一線を画し、「医療ブランド」の柔軟に自由に考える力の育成として後輩に受け継がれていくものと期待しています。また、ライフテーマとして継続的に取り組んだ研究は、「がん患者とあゆむ家族の会」として結実し、がん看護専門看護師となった修了生の協働のもとがん診療拠点病院の活動として根つき始めたこともうれしい限りです。

振り返れば、何と楽しく充実した26年であったことか。この間出会ったすべての方に、感謝申し上げます。

## 定年退職される先生からのメッセージ



看護福祉学部 教授  
鈴木 幸雄

1993年4月、看護福祉学部の開設と同時に助教授として赴任し、この3月末で定年を迎えることになりました。思えばあっという間の26年間でした。これまで、多くの皆様に支えられながら無事定年まで勤めることができましたこと、衷心より感謝申し上げます。

振り返ると、社会福祉専門職養成教育の充実に向けて決意を新たに赴任した当時の記憶が蘇ってきます。臨床福祉学科(当時は医療福祉学科)は開設時から、「社会福祉士及び介護福祉士法」に基づく社会福祉専門職の養成教育を行ってきました。社会福祉実践の基礎となる「実習」「実習指導」「演習」の教科目を重視し、高度化・多様化する福祉現場の要請に応えられる、人権感覚(社会正義)と実践能力を備えた社会福祉専門職の養成を社会福祉実習教育の目標としてきました。OSCE等も

初期の段階で導入し、充実した実習教育内容は、全国の福祉系大学でトップ水準にあります。卒業生は北海道の福祉の中核を担い、先駆的な実践は全国のモデルになっています。

今改めて、多くの教職員の皆様、福祉施設・機関関係者の皆様、そして学生の皆様に支えられて、この26年間を過ごして来られたと感じております。特に、私を育ててくれた学生諸君は私のお師匠様であり、財産でもあります。

最後になりましたが、皆様に深く感謝申し上げますとともに、皆様の今後の更なるご活躍と、本学の益々のご発展をお祈り申し上げます。長い間有り難うございました。



心理学部 教授  
リハビリテーション科学部 教授  
今井 智子

2003年4月に心理学部言語聴覚療法学科に着任し、2019年3月までの16年間(2016年4月から当別キャンパス)北海道医療大学に在職しました。着任は札幌あいの里キャンパスでした。その前は、北海道の方は多分ご存知ないと思いますが、栃木県大田原市というところにある国際医療福祉大学で教鞭をとっていました。前身である札幌医療福祉専門学校言語聴覚療法学科が4年制大学になるにあたり、北海道出身(苫小牧市)の私に声を掛けてくださったものと思います。高校卒業以来〇〇年ぶりの北海道生活でしたので、着任当時は冬の雪の多さと寒さが堪えました。あいの里もその当時は今よりも雪深い地だった記憶があります。

札幌あいの里キャンパスは心理学部のみのごちんまりしたキャンパスでしたので、学生と教員の間が非常

に近い印象がありました。心理学部1期生から多くの卒業生を送り出してきましたが、やはり1期生・2期生の印象が強く残っています。その彼らが10年以上のキャリアを持つ中堅となり、実習指導者として後進を育て、また、教員として後輩を指導してくれるのを見て、とても心強く頼もしく感慨深いものを感じます。

最後に、言語聴覚士は比較的新しい医療職です。北海道医療大学の卒業生が、北海道だけでなく日本の言語聴覚士界を牽引してくれることを心より祈念して、退職の挨拶にさせていただきます。長い間大変お世話になりました。



薬学部 准教授  
遠藤 哲也

以上の諸先生のほか、  
薬学部 遠藤 哲也 准教授が定年退職されます。  
ありがとうございました。

With heartfelt thanks.